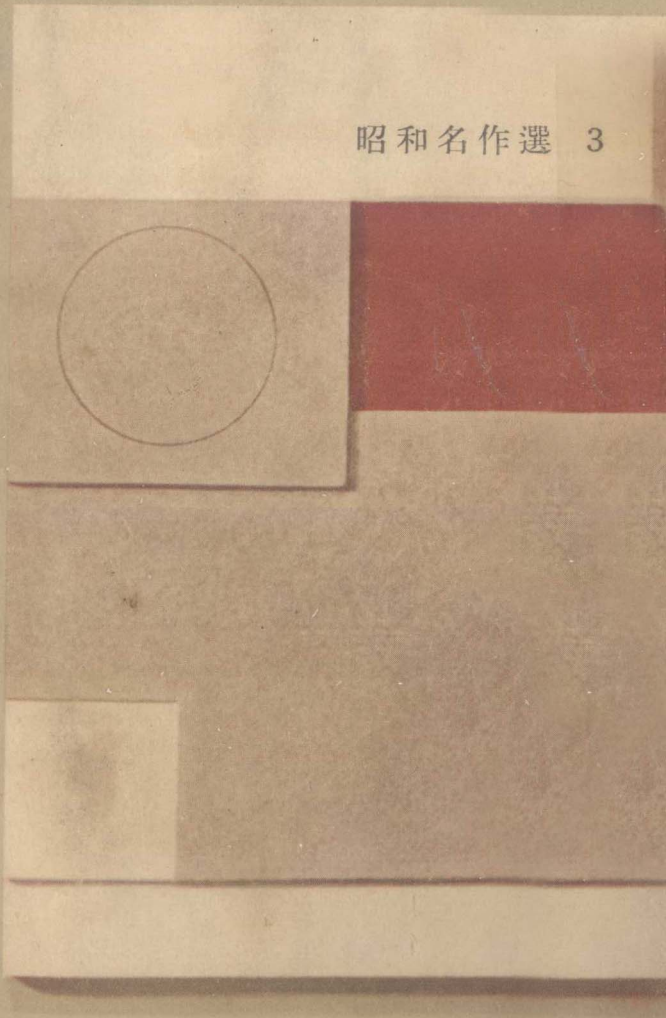
美貌の信徒

武田泰淳著

昭和名作選 3



新潮社版

武田泰淳著

美貌の信徒

新潮社版

昭和名作選

美貌の信徒

昭和二十九年七月四日　印刷
昭和二十九年七月八日　發行

定價　貳百參拾圓
地方賣價　貳百四拾圓

著者　武田泰淳

發行者　東京都新宿區矢來町十六　佐藤義夫

發行所　東京都新宿區矢來町七一　株式會社　新潮社
電話東京三四局代表七一一一(八)
振替　東京　八〇八番

亂丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

印刷　二光印刷株式會社　製本　荒木製本株式會社

Printed in Japan

目次

紅葉　三
ひかりごけ　二七
流人島にて　五九
美貌の信徒　一三
橋を築く　一五一
異形の者　一六五
海肌の匂ひ　二〇七
女賊の哲學　二三七
解說　神西清

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

紅

葉

藏二階では、ひるまでも主屋のもの音は聽えなかつた。白塗りの壁も嚴丈な土藏の上に、横に三つならんだ部屋は、主屋より綺麗なつくりで、疊もふすまも新しい。どの窓も障子をあけて、繩ひもを引くと、內側をれん瓦色に塗つた、鐵の二枚扉がしまつた。それがいかにも、山村の舊家の用心ぶかさを想はせた。窓障子の外側に、下のはう一尺ばかり厚いガラスが入れてあるのは、吹きぶりの雨や雪にそなへてであらう。主屋へは、幅のひろい長い渡り廊下を踏んで、更に急な階段を下る。留守番の寢起きする茶の間までは、そこからもつと長い廊下をつたつて、折れ曲つて行かねばならない。藏そのものが、かなり高い石臺の上に立つてゐるから、渡り廊下は並の家の屋根より高く、しかも傾斜して掛つてゐる。夜など、階段の下の廁まで往復するたび、渡り廊下はものものしくきしんだ。そのうへ横板を順に一枚づつ重ねあはせてつづく、めづらしいこしらへであるから、うつかり歩くと、往きもかへりも爪さきが板のかさねめにつつかかつた。

「もつたいない話だ。東京にこれだけの家が遊んでゐたら、たいしたもんだが」

玄關をあがつて、庭に散り敷く紅い落葉のあざやかさが眼にしみたとたん、伊井はさう思つたものだ。それが二三日すると、人氣のない田舍屋敷の、無意味な大きさに厭氣がさした。壓迫さへ感じた。

三流銀行の課長、殊に東京の下町で育つた伊井に、田舍がふむきなことは最初からわかつてゐた。溫泉でもあることならともかく、海濱や湖水のひろびろした眺めがあるわけでなし、小川の流れさへ

ちちむさくちちかまつた寒村で、ながもちするわけがなかつた。

「俺の生れた家だからね。よかつたら使つてくれたまへ。どうせ半月か一月の辛抱だろ。淋しいところだが我慢しろよ。こんなことで、つまらん金を費ふこたないさ」

取引先のいざこざがもつれて、刑事問題まで起きさうになると、責任者として、しばらく身をかくすといふ、奥の手にすがるより仕方ない。銀行も三流となれば、危い橋の渡りつづけであるから、伊井は氣樂に、支店長のすすめにしたがつたまでの話である。

「夏は涼しいからね。うちでも子供だけは、毎年行つてるんだ。冬はスキイで、やつぱり子供だけ遊びに行く。今はどつちつかずの季節だから、時期としちやわるいんだけどね。食物もロクなものはないよ。どうせ田舍だから」

伊井は、出張には慣れてゐる。貸附の相手方たる會社の、持ち工場が地方にあれば、どんな山村にでもでかけて行く。ここでも、來るなり、村街道を調査氣分で歩いてみた。凍豆腐の製造所が一軒、無氣力に冬を待つて、古トタンの屋根を傾けてゐる。石造の門や、寮らしき二階建など、構へだけは立派な肥料工場が、これも休業中だつた。一昨年とか、村の資産家が、近くの石灰山を利用しようとはじめた仕事である。村の農民が、できあがつた製品を、しぶしぶ使用したのは、次男三男が肥料工場へ通つてゐたからにすぎない。化學成分がどうまちがつてゐたものか、その肥料は畠の作物を、すつかり痛めた。金を出して毒を買はせられたと、腹を立てた農民は、代金を還せと、工場主に談じこんでゐるが、今だに解決はつきさうにないとの話だ。

線路をはさんで、兩側にひろがる水田は、どちら側もすぐ、山地でゆきどまりだつた。うらさびれた灰色の風景の中で、小學校の建物だけが目立つて大きいのは、かへつて「これが精一杯」といふ、貧しさを物語つてゐた。どう見積つても、企業など起りさうのない地帶である。企業に縁のない土地

は、銀行には無用の土地、つまりは伊井に緣のない場所である。

只一つ、めつけものは、留守番の婦人が三度々々こしらへて出す料理である。トンカツ、コロッケ、カレーライスの洋食類のほか、鯉の煮つけ、鯉こく、とろろ汁など、田舍風の料理もすべて念入りで風味があつた。「わたしは料理がへたで、何もできないから、お客さんの口にあふだかどうだかと思つて」と、口ぐせのやうに言つて、遠い炊事場から運んで來る。膳をさげるときにも、「まづいものでお氣の毒だけど、召上つて下さいよ。あまり食べないと心配だで」と、客の食慾を氣づかはしげにうかがふ。

おやすさんと呼ぶ、その留守居役の女性は、まづその禮儀正しいところが、伊井の氣に入つた。銀行で使ふ若い女職員の、だらしのなさに手を燒いてゐる彼には、ことにそれがめづらしかつた。十歲の女の子を育てて、獨身でくらす戰爭未亡人といへば、待合や料理屋の女中さんなどによくある例で、四十に手の屆く伊井がとくに興味を抱く對象ではない。客とのつきあひで外泊の機會も多い彼は、東京めがけて集つて來る南北各地方の女に觸れて、雜多な性格、雜多な體臭も嗅ぎつけてゐる。驛を二つ三つ過ぎれば、この地方でも女に不自由しない遊樂の町があつた。それ故、農業に從事する土臭い三十女に興味を惹かれだしたと氣づくと、「何故かな、をかしな話だ」と、我ながら不思議がらずにはゐられなかつた。

おやすさんは筒袖の着物に、もんぺ。農家の女が野らに出て働く服裝である。出迎へのため驛に來た彼女は、それがよそゆきらしく、筒袖ともんぺが揃ひの紫一色であつたが、それもかなり着古してあつた。他の農婦とさしてかはらぬいでたちなのに、清潔な感じがするのは、色白の丸顏のためらしかつた。色白といつても、肉のゆたかな頰は山國の女らしく林檎色に陽燒けしてゐる、眉と眉、眼と眼のあひだが、ゆつたりとひらいて、その眉は長くのびて、眼は大きい。まつげは長く、大きな兩眼

はかなり敏感に感情を示す方で、フッと急に不安か淋しさか、暗い緊張に沈むことがある。もとより蒼白い陰影の多い、都會女のエロ味などは全く見えない。ただ單純に明るい童顏で、手脚にも働きもののたくましさがあるのに、健康そのものの顏に、すばやい變化が起る。それが、みな兩眼に突然あらはれる、その暗い緊張のためである。そんなときは眉根から額にかけ、又耳から襟もとにかけ、地肌の白さが、青みがかるほど、強くサッと刷毛ではいたやうに走る。

「明るいのんき者のやうなんだが、神經はこまかい方なのかな」と、伊井は觀察する。

觀察する機會はきはめて少い。と言ふのは、三度の食事、寢床の世話以外は、彼女が藏二階へ上つて來ないからである。

遠慮してことわつても、毎晩たててくれる風呂へ入るたび、伊井は茶の間の炬燵で坐りこむことにした。ちやうどその時刻には、彼女が炊事場で、夕食の仕度にまめまめしく立ちはたらいてゐるからである。アメリカ出稼ぎで一儲けした、この家の先代が建てただけあつて、廣い炊事場はやや新式のつくりである。三つ並んだかまどからは、すさまじいほど薪の焰が噴き、鍋釜ややかんからは湯氣がさかんに立ち昇つてゐる。

「いそがしいところ、氣の毒だね」

「へえ豆こぎも稻こぎも、うちはすんだで、ひまになりましたから。未亡人會の女衆も近所のもんも、よく畑やなんか手つだつてくれるでね」

火光と湯氣と煙のゆらめきの奥から、おやすさんはさう答へる。

親子二人の暮しの貧しさは、垢づいた炬燵蒲團や座蒲團のうすさ汚さでも、よくわかる。小學校三年の光ちやんのジャケツやズボンの破れは、近所の子供たちより、一段とひどい。新聞は伊井が泊るやうになつてから、毎日買ひに行く。

「月ぎめで取つてねえもんには、配達してやらないさうです。月ぎめにしてくれと言ふから、そんな餘分な錢はねえわと言つてやつたんですよ」

貧乏とたたかつてゐるといふ特殊のそぶりもないし、ジメジメとこぼすねばつこさをもない。陽のささぬ煤けた茶の間の片隅には、佛壇はなくて神棚が祭られてゐる。戰歿者の遺族に、昨年から支給される年金で買ひととのへた、木の香も新しい、神殿を模した祭壇である。「つまらんことに、せつかくの金を」と伊井は思ふが、彼女にとつては、念願かなつた快事らしい。祭られた死者の名は、夫、夫の父母、彼女自身の父母、兄弟。と、親しい身うちがそろつてゐる。

父親のないせゐか、光ちやんは東京からの客になれ親しんで、唱歌もうたふ。繪日記や教科書を炬燵へ持ち出す。母親は子供の繪日記を客に見られるのが心配らしく、何册目の何ページあたりをめくつてゐるかと、遠くからのぞいたりした。

「——ばんごはんをたべるとき、ごはんほんとにおいしいねえとお母さんが言つた」

せいぜいそんな個處が、見られて恥しいのであらう。伊井を面白がらせる家庭の祕密など、書かれてはゐなかつた。

茶の間よりもつと暗い次の間の唐紙には、破れをかくすため、伊井の銀行のポスタアが貼られてある。支店長の次男が夏休みに歸鄉したさい、親孝行のつもりでしたことである。そのいかにも都會風な桃色のポスタアは、乾燥いもをすばらしい御馳走として、嚙みしやぶつてゐる、わびしい母子にはふさはしくなかつた。手づくりの乾燥いもは砂埃でジャリついて、死人の指のやうに細くちぢかんでゐた。

「今年はどこも、稻のできがわるいらしいね」伊井は、新聞の記事を話のたねにした。

「このへんは、例年とあまりかはりないさうですけど。だけんど、供出の關係があるでね。なるだけ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

できがわるいわるいと言つとかないと困るですよ」
そんな話になると、おやすさんは何もかも心得た苦勞人のおちつきと、皮肉をふくませた鋭さを示した。笑ひをまじへた、ハッキリした口調で言つて、そのあとでやはり不可解な暗い緊張で、大きな眼の長いまつげを伏せた。
支店長の家とは遠い親戚にあたり、その緣故で留守番がてら、置いてもらつてゐる。そのためか、伊井の銀行の營業狀態などには、氣をくばつてゐる樣子だつた。
「彼なかなか優秀だからね。今、うちの支店長のなかぢや、僕らの支店が一番成績をあげてるんぢやないかな」
「へえ、さうですか。それぢやいいですね。わたしにや何もわからないけんど」
遠慮がちに、安心の微笑ももらした。支店長からは、一人行くから世話をよろしくと、爲替同封の手紙がとどいてゐるにせよ、見も知らぬ客の突然の來訪、かなり永い逗留には、疑念を抱くのが當然である。しかし彼女は、そんなそぶりを少しも見せなかつた。
村の未亡人會なるものについては、ほんの二こと三こと、おやすさんの口から聽かされてゐた。勝手口に休んでゐる中年の農婦を「このひとは、わたしと一番仲よしの女です」と、紹介されたこともある。「やはり戰爭未亡人でね。農業をやつて三人の子供を育てなさつた、偉いひとです。今、未亡人會の幹部をやつてるですよ」彼女が、その農婦を心から敬愛してゐることは、その紹介の仕方でよくわかつた。おやすさんは光ちやん一人、その幹部は子供三人と、負擔の比重をくらべての感服もあり、そのうへ、未亡人會の幹部といふ比重が、その感服に多少影響してゐるとも思はれた。
未亡人會の特殊の性格が伊井の耳に入つたのは、隣家の篤農家の口からである。
この地方の農家の經濟狀態を、ひまにまかせて調べたい商賣心が動いて、誰か適當なお百姓をと、

彼はおやすさんに頼んだ。「どんなひとがいいんかしらな。村では指折りの百姓のうまいをぢさんが、隣にゐるですが。そのひとがいいかしら。今年はトマトが、どこの家でもわるかつただけどね。そのをぢさんの所だけは、こんな大きなのがなつてね」

客の注文を注意ぶかく考へあぐねたすゑ、彼女はさう答へた。

五十年輩の篤農家は、百姓らしいユウモア味を着けて、遠慮のない冗談もとばす人物だつた。をぢさんの父親と、支店長の父親は無鐵砲な博打仲間で、をぢさんも支店長も「てめえ、おら」のつきあひである。

「ここの先代も、うちの親爺も博打で田畑を手放したのさ。ここの親爺の方は、アメリカにすつ飛んで、金をこせえたがね。瀬戸物の行商か何かして儲けた様子だ。その金で、こんなでかい家も建てられたんだ。この村にゐついたもんは、ダメさ。この村で金持になつた者は、アメリカへ行つたここのうちの親爺と、横濱へ行つて貿易やつて儲けた秋田だけだからね」

伊井のすすめるウイスキイで醉つたをぢさんは、支店長を幼名で「良ちやん」などと呼んだ。

「このあひだ俺、良ちやんが歸つて來たとき叱りとばしてやつただよ。あの野郎、歸つて來たつて、すぐ驛前のドラゴンで飲みはじめやがつて、一向家へもどらねえだからな。俺がドラゴンの前を通ると、野郎がオイオイと呼びとめたから、てめえ、親爺の墓もまだ立てやがらねえで、こんなところで三日三晩酒飲んでる奴あるかつて、怒鳴りつけてやつただ」

威勢を見せた口ぶりは亂暴でも、良ちやんに對する愛情はにじみ出てゐる。話は自然、おやすさんの身の上に向ふ。

「あの子も可哀さうな女でな」おやすさんの畑仕事も手助けしてゐるをぢさんは、がらりと變つた、しんみりした口調になつた。

「子供んときにふた親をなくして、それからズッと伯父の家で厄介になつてたのさ。兄きたちも早く死んじまつたからな。全くのひとりつきりでな。俺はいつも再婚しろとすすめてるだがね。なかなか承知しねえ。あれは器量は十人並以上だから、もらひてはいくらもあるんだ。つまらない意地い張つてねえで、再婚すりやいいによ。未亡人會といふもんも、あれでよしわるしだな……」そこでをぢさんは、一寸口ごもつた。

「この村には戰爭未亡人が十四、五人ゐるがね。そのうち再婚したのは三人だけで、あとはみんな今でも獨身でガンバッてるだからな。未亡人會と言ふものがあるために、かへつてお互ひ牽制しあつて、自由に結婚できねえでゐるんぢやねえかと、俺は思ふな。男としてさう思ふわな」

「そりや大へんな話ぢやないですか」

「さうだ。困つた話だわ、な」

篤農家は未亡人會の話をそれで打ち切りにした。そして、野菜の葉うらの害蟲でも探す目つきで、良ちやんは東京で成功したのか否か、伊井さんは何日ぐらゐこの家に宿泊する豫定か、又その目的は何かなど、愼重な質問をかさねた。

「大へんな話」などと、うつかり伊井は銀行員の冷靜なたしなみを忘れて、口走つた。その瞬間だけは、何とも息苦しい感じがしたのは事實だ。だから田舍はイヤだよ。すぐこれだからな。だが要するに、農民は農民、おやすさんはおやすさん、俺は俺と、それだけの話ぢやないかと、想ひかへした。未亡人おやすさんと彼との關係と言へば、ただたんに、客と留守番といふ、不思議な御緣にすぎないではないか。

冬季、乾燥することにかけては日本で指折りの縣だけあつて、空氣は澄み切つてゐる。家を一歩出れば、脫穀機のモオタアの音で、水を乾した水田はにぎやかだつた。石で疊んだ溝のほとりでは、澤

庵漬にする大根を、清い流れですすいでゐる。老婆は豆のカラをむく。老爺は、冬越しの薪を、あたたかい日向に蓆をしいて、割つてゐる。泥土ばかりむきだして、綠色の精氣などてんで見えない、灰色の地帶ではあるが、散歩がてら近づいて行くと、どこでも忙しげに、誰かが働いてゐた。

線路を越えて向う側まで足をのばしたときなどは、あたり一面の脫穀機のひびき、手拭をかぶつて稻束を手にした農婦や、稻穗を機械の齒に押し入れて、顏を埃だらけにした靑年や、親たちからはなれてションボリと畔路に坐つた子供などの視線を殘らず全身に浴びるやうな氣がして、そそくさと逃げもどつたものだ。

「これけえ？　杉の屋（村の舊家には屋號がつけられてゐた）に泊つてる東京の客人といふ奴は。何してるだ、この男。てえもねえ（他愛ない）なあ。ああやつて、遊んでるだ」

すべての視線が、さう語つてゐた。

したがつて、伊井の散歩する場所はだんだんと、農民の姿の見えない、涸れた小川や、林の陽だまりや、野獸の背のやうに低い灌木を密生させた山裾などにかぎられていつた。痩せた耕地にはもつたいないほど、幅のひろい一直線の耕作用の路を、おやすさんは、村の誇りにしてゐる。だが伊井は、そんな人眼につく路を避けて、山に向つて、うねり登つてゐる、堤に沿つて歩いて行く。夏の豪雨の名ごりをとどめて、堤は痩犬の脇腹のやうに、內側も外側も泥土が、そがれ崩れてゐる。晩秋のまひるの光が、堤を蔽ふ枯草や枯枝を、あたたかくかがやかす。毎年の雨水の流れで、深く深くとゑぐりとられた狹い川底は、日光もささぬ荒れた肌に、小石や岩をさらけ出し、乾きはててゐた。起伏のひどい堤の路は、細々とつづいて、やがて古い石の祠をいただいた塚山や、山側からなだれ落ちんばかりの竹藪、美しい日光の縞模樣を落葉の敷物の上にひろげた、まばらな林へ入つて行く。

短い灌木の枝葉は、なかば枯れ落ちてゐて、枯草は枯れ伏したために、かへつて草の厚みで地肌を

なだらかに匿してゐた。そんな凹みに脚を投げ出すと、すぐ鼻のさき、想ひもかけぬところに、つぶらな紅い木の實が下つてゐた。簪（かんざし）にしたいやうな小さな赤い珠は、五つか六つづつかたまつて、茶色にかさなりあふ枯枝の先で、艶々と光つてゐた。

「涸山水（コセンスイ）」。庭園に趣味をもつ重役から聽かされた、そんな古風な單語も想ひ出された。

丸木を數本並べて掛けわたしただけの、橋から先は、奥深い杉山へみちびく、けはしい山道だつた。右手の開墾地には、根株がゴツゴツと殘されて、はるか彼方では、山燒きの煙が、うすくたちのぼつては、青い空や杉の茂みに消えた。

伊井の腹這ひになつた凹地のすぐそばまで、農婦と青年が登つて來たことがあつた。五十がらみの農婦と、ズボン姿の無帽の青年は、二人とも腰に、小さな籠をつけてゐた。見下してゐる伊井の姿には、氣づかなかつた。彼等は、赤い木の實をゆつくりともぎとつては、籠に入れた。探せば木の實は、堤にそつてまだまだゆたかに、採り殘されてゐるらしい。

「結婚もしたくなからうさ。あ？　おやすさんは、今でも惠まれた身分ぢやんか」

農婦のいかにも五十女らしくしやがれた聲が、冷い風に乘つて、二人の會話の一つを、運んできた。

「客があればあつたで、畑仕事をほかのもんにまかせてよ。あれぢや亭主も何も、ないがましと思つとるよ」

反對意見らしい青年の聲は、モグモグと聽きとれない。

「結婚せえでも、男に不自由するこたねえわさ。杉の屋は、誰一人うちのもんがゐるわけぢやなし……」

聽こえたのはそれだけで、二人は更に木の實を求めて堤を降り、壕のやうな川底へ姿をかくした。

そこからは斜面の耕作地、小學校の裏側、村の家々、線路を越えて再び高まつて、別の山脈につづ

く耕作地が見わたせた。青空をくぎつて浮ぶ遠い山の壁まで、ひろびろとしたその眺めのなかで、杉の屋の白壁が一番近い人家だつた。それでも、藏二階は小さく小さく見えた。白壁のぐるりは、槍の穗さきがたに刈りこまれた庭樹にかこまれてゐた。天を突くかたちで、突き立つた庭樹は、あたりの荒涼たる眺めに反抗するやうに、屋根より高く直立してゐた。主屋は見えなかつた。

「大へんな話だな」伊井は、その見えない主屋の住人をとりかこむ、山國の空氣のきびしさを感じて再びさう思つた。すると俺はあの藏二階に、問題の彼女の傍に住んでゐるわけかといふ想ひが、池に張りつめた薄氷が端から端までミシリとひびわれる、あの速さと鋭さで襲ひかかつた。

村の小學校の教員が三名、伊井の招きに應じて、杉の屋を訪れた。いづれも伊井より年下であるが、村民に監視されながら村民の子供をあづかる、教育者の用心深さを具へてゐた。教育に熱心な村民は、教員の授業ぶりのみならず、教員の私生活をも、たえず比較研究してゐる。おやすさんでさへ、村の教育者に對する觀察と批判となると、肉を割り骨を斷つ鋭さを示した。

「前の校長は、あまりペコペコするで、村のもんはみんな馬鹿にしてたですよ。馘になるのが恐いで、必要もないのに誰にでも愛想ふりまいて、そればつかで人氣とらうとしたでね。何故あんなにするだかつて、みんな笑つてました」「一番若い先生は、元氣者でね。大きな聲で怒鳴つたりして面白いですよ。なかなか理窟屋だから、他の年上の先生の言ふこと聽かないで、喧嘩するのは困るです。元氣よすぎて、生徒を毆つたりしてね。それで問題を起したりしたですわ」

その短氣者らしい「一番若い先生」は、たしかに元氣よく意見をのべた。

「プリントをどんどん刷つてやるのも、いい手だと思ふな」と、彼は言つた。「毎日々々、宿題でも指導方針でも、がり版で刷つて子供に渡してやると、親は信用するからね。今度の先生は、熱心ないい先生だつてことに必ずなるな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com